

8110 晩夏の夜空はいちめんの星明かりで、・・・

晩夏の夜空はいちめんの星明かりで、空気に強い草の香がまじった。広場の奥は雑草が群がり、しきりに地虫の声が沸いている。行手に堤防があり、その向うを、闇を呑んでゆっくりと河が流れていた。

星明かりのなかに、人影が見えた。なにかの企みでも交す場面のように、その影は、あたりを警戒するふうに、ひっそりと柳に近づいてきた。

「柳か？」

伊藤桂一『水と微風の世界』

[許容訳例]

The night sky of late summer was stary all over and there was a strong fragrance of grass in the air. In the depth of the open space weeds grew in crowds and insects were chirruping incessantly. There was a bank ahead, and beyond it the river flowed slowly, swallowing up the dark.

In the starlight a figure became visible. As if in a scene in which some plot was being hatched, the figure stealthily and silently approached Yanagi.

“Yanagi?”

[翻訳例]

The late-summer night sky was suffused with starlight and a strong fragrance of grass mingled in the air. The far side of the open space was crowded with weeds, from which arose a steady chirruping of insects. Directly ahead rose an embarkment; beyond, the darkness was engulfed in a slowly-flowing river.

A figure appeared in the starlight. It approached Yanagi stealthily, silently, as though in some conspiratorial scene.

“Yanagi?”

■晩夏の夜空はいちめんの星明かりで、空気に強い草の香がまじった。(8110)

★「晩夏の夜空」は the night sky of late summer でいいですし、これは書かれた文なので、late summer をハイフンで結んで形容詞化(late-summer)して the late-summer night sky としてもいいでしょう。

★「いちめんの月明かりであった」は was starry all over でもいいですが、もう少し日本文に近く変換するとしたら was suffused with starlight でしょう。be suffused with…は「光・涙・色などで覆われる」ですから、「いちめんに」の意味も含まれます。

★「空気に」は in the air でしょう。

★「強い草の香」は a strong smell of grass でいいのですが、日本語が「匂い」ではなく「香」ですから、fragrance の方がいいです。

★「(草の香が) まじった」ですが、「まじっていた」なら there was a strong fragrance…と

なるでしょうが、「まじった」は主人公が移動している様子がうかがえます。したがって、日本文と同じように a strong fragrance を先頭に出して A strong fragrance of grass mingled in the air とした方がいいでしょう。なお、mix（混ぜる）は使えません。

■広場の奥は雑草が群がり、しきりに地虫の声が沸いている。(8110)

★「広場」を辞書で見ると、open space; open square と出ています。square というと、the Red Square（赤の広場）とか、Trafalgar Square（トラファルガー広場）とか、ヨーロッパの街にあるような整然とした広場のイメージです。ここは田舎の村の広場のイメージで open space がいいのではないのでしょうか。

★「奥」には back; depth などが考えられますが、ここでは「一番向こうのよく見えないところ」を言っているような感じですから、the far side of the open space くらいでいいのではないかと思います。

★「雑草が群がり・・・」は be crowded with weeds とか weeds grew in crowds とかでいいと思います。

★「しきりに」は insistently あるいは steadily でしょう。

★「地虫」はコガネムシ科の昆虫の幼虫の総称なのですが、幼虫が鳴くはずはなく、ここは地面にいる昆虫の意味で使ったのではないかと思います。したがって insects でいいと思います。

★「(地虫の) 声が沸いている」は英語では「沸いていた」と過去にせざるを得ません。「しきりに」と合わせると「地虫が鳴いていた」と解釈していいと思います。ところで「(虫が) 鳴く」は chirp でもかまいませんが、これはちょっと甲高い鳴き方で、虫というよりは鳥のさえずりといった鳴き方です。虫の場合は、もう少しやわらかく、鈴の音のような感じがすから chirrup の方がいいと思います。ただ、日本語は「声が沸いている」なので chirrup を動名詞にして「湧く」に arise を使い、「しきりに」を動名詞のなかの動作部分を修飾する形容詞として使って a steady chirruping of insects arose とすると日本語の表現に対応することが出来ます。動詞派生名詞の場合、全体に懸かる形容詞を使うことも出来るし、中の動作だけに懸かる形容詞を使うことも出来ます。何回か前に「熱心な読者」を an enthusiastic reader としましたが、これも「熱心な」は「者(人)」ではなく「読む(行為)」に懸かっています。

●関係詞で一体感を出す

「広場の奥は雑草が群がり、しきりに地虫の声が沸いている」は「[り]」の次に「そして」と加えることができるので and で結ぶことができますが、それでは「順次」感が出てしまいます。ここは、もう少し一体感を出すために関係代名詞を使うことの出来る典型的な例です。The far side of the open space was crowded with weeds, from which arose a steady chirruping of insects.となります。

■行手に堤防があり、その向うを、闇を吞んでゆっくりと河が流れていた。(8110)

★「行手に」は(up) ahead でしょう。

★「堤防」は bank でもいいのですが、たぶん人間が作った堤防でしょうから embankment の方がいいでしょう。

#### ●文の構造

「行手に堤防があり・・・」ですが、「・・・に・・・がある」という日本文に出会うとすぐに思いつくのが There is...構文です。There was a bank[embankment] ahead. でもいいのですが、この表現は鳥瞰的で臨場感に欠けています。日本文は「行く手に・・・」と「行く手」が先頭にあるので、英語でも Directly ahead rose an embankment...として臨場感を出したいです。rise は「物が目の前に現れる」という意味です。

★「その向うを」は beyond (it) でしょう。

★「闇を呑む」は、主語(the river)を補って、そのまま英語に変換すると the river swallows up the dark となり、これでもいいのですが、イメージが沸くかどうか心配です。「没する；飲み込まれる」のイメージを表すことばに engulf があります。これを使うと the darkness was engulfed in the river という表現が可能です。なお、「闇」は dark でもいいのですが、darknessの方が「闇」が深くなります。たとえば、「無」は nothing でもいいのですが、サルトルの『存在と無』の英語訳は *Being and Nothingness* です。nothingness とすることで being と同じ存在感が出てきます。

#### ◆進行形の使い方

★「ゆっくりと河が流れていた」は flow を使うなら slowly ですが、was engulfed in the river を使うなら in a slowly-flowing river です。ところで、「流れていた」を was flowing と進行形にする必要はありません。進行形というのは「今現在何が起きているか」「過去のあるとき何が起きていたか」を強調する表現です。ここで was flowing を使うと、そのとき何かが行われていることを強調したい言い方になります。ですから、どういうふうに流れているかを説明したいときとか、流れているときにちょうど何かが起こったという場合に使うのです。(毛利可信氏は、過去進行形を「背景の過去進行形」と称していました) ここはそのいずれでもないのですから flowed でいいのです。

●「・・・[で]・・・していた」(主動詞+句)か「関係詞の代わりにセミコロンを使う」

「行手に堤防があり、その向うを、闇を呑んでゆっくりと河が流れていた。」を連結辞の観点から見ると「行手に堤防があ[り]、その向うを、闇を呑ん[で] ゆっくりと河が流れていた。」ですから[り]は and で、「・・・[で]・・・していた」は英語では「主動詞(flowed)+句(swallowing up...)」で There was a bank ahead, and beyond it the river flowed slowly, swallowing up the dark.と連結することができます。また、この文「行手に堤防があり、その向うを、闇を呑んでゆっくりと河が流れていた。」は、前の方の関係詞を使う典型的な例「広場の奥は雑草が群がり、しきりに地虫の声が沸いている。」(The far side of the open space was crowded with weeds, from which arose a steady chirruping of insects.)と日本語の構造が同じです。したがって、ここも関係詞を使ってよい典型的な場合で、Directly ahead rose an embankment, beyond which the darkness was engulfed in a slowly-flowing river.とす

ることができます。しかし、同じページの中で同じ構文を繰り返して使いたくないので、関係詞を使わずに…an embankment; beyond (it) the darkness…と工夫することになります。

■星明かりのなかに、人影が見えた。(8110)

★「星明かりのなかに」は in the starlight でしょう。

★「人影」は「人の影(the shadow of a person)ではなく「人の姿」((human) figure)です。

◆could の注意点 (星明かりのなかに、人影が見えた。)

「(人影が) 見えた」は、すでに見えていたのではなく、そのとき見えたということです。から became visible とか appeared (現れた) にしないと日本語とずれます。したがって、ここで could be seen (見えていた) は使えません。また、これを使うと「誰かがそこにいるかどうか、(私には見えないけれど) もし見る人が見ると星明かりでも、それが見えるだろう」(仮定法) という意味になります。肯定文の could が can の過去形として使われるのは間接話法内の時制の一致の場合だけと考えておいた方がいいでしょう。can/could はそもそも一般論的可能性を言うのであって、現実に関何らかの行為・動作を実行できた場合には使えないのです。ただ、知覚動詞には使えます。それは、知覚動詞が個人の能力に関係なく無意志の動作・行為を表すからです。たとえば、I can hear the bells tolling. (今、鐘が鳴っているのが聞こえる) と言えます。これは (19 世紀の小説の文のようであり、現在は日常会話では使わない) I hear the bells tolling. と同じです。差異は can を使った方がかすかに主体性が感じられる程度です。ですから「見えていた」という意味でなら could be seen も使えるのです。江川さんの『英文法解説』(p.291 could(1))の解説のところに I could see a figure in the dark. (暗闇の中に人の姿が見えた) という例文が出ています。これを passive voice にすると A figure could be seen in the dark. が出来ます。

■なにかの企みでも交す場面のように、その影は、あたりを警戒するふうに、ひっそりと柳に近づいてきた。(8110)

★「企み」には「陰謀(a plot)・悪巧み(a scheme)・共同謀議(a conspiracy)など、いろいろありますが、ここでは plot でも conspiracy でもいいでしょう。

★「(企みでも) 交す」は「陰謀を企てる」と解釈して hatch が使えます。ただ、使うなら「そのとき企てていた」と進行状態(some plot was being hatched)にすることが大切です。

★「・・・でも・・・場面のように」は「まるで・・・場面であるかのように」で as if it were in the scene…ですが、省いて as if in a scene…とすることが出来ます。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(なにかの企みでも交す場面) を句に変える

「なにかの企みでも交す場面 (のように)」は「連体修飾節 (何かの企みを交す) ＋不定代名詞的体言 (場面)」ですから「名詞＋関係詞節」で対応することが出来ます。「名刺(a scene)＋関係詞節( that [in which] some plot was being hatched)です。これに「・・・でも・・・のように」を加えると as if it were a scene that[in which] some plot was being hatched となりますが、もう少し工夫すると as if in a scene in which some plot was being hatched となります。さらに手を加えると、この節は as though [if] in some conspiratorial scene と句に変え

ることができます。

★「その影」とは「その人影」のことですから the figure です。

★「あたりを警戒するふうに」は stealthily（人にわからないように）を使えばいいでしょう。

★「ひっそりと」は silently とか quietly です。

★「柳に近づいてきた」の「柳」は木の柳(willow)ではなく人の名前なので(The figure) approached Yanagi です。

■「柳か？」(8110)

★「柳か？」は、端的に“Yanagi?”でいいでしょう。